

Title	フリッツ・ヴィッテルスと「二人の精神的父親」： カール・クラウスとジークムント・フロイト
Sub Title	Fritz Wittels und seine "Geistigen Väter" : Karl Kraus und Sigmund Freud
Author	高橋, 義彦(Takahashi, Yoshihiko)
Publisher	慶應義塾大学大学院法学研究科内『法学政治学論究』刊行会
Publication year	2013
Jtitle	法學政治學論究：法律・政治・社会 (Hogaku seijigaku ronkyu : Journal of law and political studies). Vol.99, (2013. 12) ,p.165- 198
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10086101-20131215-0165">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10086101-20131215-0165</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# フリッツ・ヴェイトテルスと「二人の精神的父親」

——カール・クラウスとジークムント・フロイト——

高 橋 義 彦

- 一 はじめに
- 二 クラウス⇨フロイト⇨ヴェイトテルス——三者関係の変化
- (一) 「二人の父」との出会い
- (二) フロイトのヴェイトテルス⇨クラウスへの違和感
- (三) クラウスのヴェイトテルス⇨フロイト⇨精神分析への違和感
- (四) 三者関係の破局——一九一〇年
- (五) まとめ——三者関係の「その後」

## 一 はじめに

二〇世紀初頭のウィーンにおいて「セクシュアリティ」をめぐる議論の中心にいたしたのは、疑いなくカール・クラウス（一八七四—一九三六）とジークムント・フロイト（一八五六—一九三九）であった。一九〇二年に自ら編集・発行していた雑誌『ファッケル』で「道徳と犯罪」（F115: 1-24, 1902）と題した論文を発表して以来、姦通や同性愛、売春を刑事裁判で裁くことを批判し、私的領域における性的自由を訴えたカール・クラウス。一九〇五年に『性理論三篇』を発表し、「無垢な子ども」というヴィクトリア朝的な市民道徳に真っ向から挑戦するような幼児性欲の存在を論じたジークムント・フロイト。両者が一時期友好関係にあり、「セクシュアリティ」をめぐる論争においていわば「共闘関係」にあったことは、つとに知られている。<sup>1</sup>

クラウスとフロイトの個人的関係は、一九〇四年一〇月にフロイトがクラウスに対し彼の『ファッケル』における論説を賞賛する手紙を送ったことに始まる（F257-258: 40, 1908）。当時フロイトは『ファッケル』の定期的な読者で、自らの著作においてもたびたびクラウスに言及している。<sup>3</sup> 一九〇六年一月、オットー・ヴァイニンガーに自らのアイデアを剽窃されたのはフロイトの責任だと憤るヴィルヘルム・フリースに手を焼いたフロイトはクラウスに助けを求め、<sup>4</sup> クラウスは『ファッケル』誌上でこの問題を論じる（F210: 26-27, 1906）。この件に関し、フロイトは「フリース事件は惨めなものだが、あなたと個人的な知り合いになるという願いはかなえてくれそうです」と書簡でクラウスに書き送り、<sup>5</sup> 他の書簡でも自らの思想とクラウスのそれとの「部分的一致」を指摘したり、<sup>6</sup> 「われわれ少数派は団結すべきなのです」とクラウスを自分の同志とみなすような発言もしている。<sup>7</sup> これらの書簡から読み取れるのは、両者の関係が一八歳年上のフロイトの熱心な歩み寄りによって始まったということだ。

一方でクラウスも同性愛をめぐる裁判を批判するに際し、「われわれはジークムント・フロイト教授と共に、同性愛者が刑務所に入るべき人間でも、精神病院に入るべき人間でもないことを認める洞察と勇気を持つべきだ」(F187: 21, 1905)とフロイトの名に言及して自説を展開し、さらには幼児性欲の強調ゆえに批判にさらされていたフロイトの『性理論三篇』に対する好意的な書評を『ファッケル』に掲載した(F191: 8-11, 1905)。この時期の両者を評して、まるで「双子」のようであった、と呼ぶ研究者もいる。<sup>(9)</sup>

しかし一九〇八年ころまで続いたこの良好な関係は、次第に冷却化し、一九一〇年に決定的な断絶を迎える。同年クラウスは「精神分析とかいうものは、自分たちだけは例外として、世界におけるすべてのものを性的原因へと還元する好色な合理主義者たちの活動のことだ」(F300: 26, 1910)と痛烈に批判した。こうした攻撃に対しフロイトは公的には沈黙を守ったものの、精神科医サンドール・フェレンツイ宛書簡の中で、かつて自著の中で「才気活発な作家」<sup>(10)</sup>と呼んだクラウスを「偉大な劇的才能を持ったとてもない知的不具者」とこき下ろしている。<sup>(11)</sup>なぜここまで両者の関係は悪化してしまったのであろうか。この関係の変化の過程を詳しく見ていくと、両者の関係の断絶に大きな役割を果たした一人の人物が浮かび上がってくる。彼こそフリッツ・ヴィッテルス(一八八〇—一九五〇)である。<sup>(12)</sup>

ヴィッテルスは一八八〇年にウィーンの同化ユダヤ人の家庭に生まれた。ウィーン大学を卒業した後、医師となる。早くから文筆活動にも関心を持ち、一九〇六年末にクラウスに手紙を送って自らの原稿を売り込み、一九〇七年から翌年五月にかけ『ファッケル』に一三本の論文や創作を掲載した。また一九〇六年より勤め先のウィーン中央病院におけるフロイトの講義に参加し、一九〇七年三月にウィーン精神分析協会への加盟を許されると、一九一〇年までに(自著の合評会も含め)一〇回の報告を行った。彼はほぼ同時期にクラウスとフロイト両方のサークルに属していたのである。

だがフロイトとクラウスを「二人の精神的父親」(Memoirs, 48)と呼ぶこの人物は、クラウス研究、フロイト研究

双方において悪名高い。なぜなら彼こそ一九一〇年一月に精神分析協会において、「フアツケル・ノイローゼ」と題した報告を行い、俗流精神分析的手法でクラウスの言論活動をエディプス・コンプレックスから説明し、これを耳にしたクラウスの精神分析嫌いを決定付けた人物といわれるからである。さらに彼はこれに飽き足らず、クラウスとその仲間たちを揶揄した小説『エゼキエル——よそのもの』を——フロイトの制止を振り切って——一九一〇年秋に出版し、クラウスのさらなる怒りと買うと共にフロイトにもいわば「破門」され、精神分析協会を脱会した。彼は二人の父から同時期に「勘当」されたわけである。

興味深いことに、ヴィッテルスがクラウスやフロイトの知己を得た一九〇七年から、両者と関係が断絶する一九一〇年は、クラウスとフロイトの関係が次第に冷却化していく時期と重なる。しかしレオ・レンシングやエドワード・ティムズらの先行研究があるものの、この三者間の関係は特に日本においては詳細に研究されてきたとはいえない。それは資料的な制約と同時に、クラウス研究においてもフロイト研究においても、ヴィッテルスがあくまで脇役的存在に過ぎなかったということに由来しているといえよう。だが近年ヴィッテルスが晩年に記した『自伝』が刊行されたことで、より詳細な三者間の関係が明らかになった。<sup>(13)</sup> 本論の第一の目的はこのヴィッテルスの『自伝』やクラウス、フロイトの各種書簡、『フアツケル』所収の論文、精神分析協会の議事録といった一次資料を用いて、三者の関係が始まる一九〇七年から断絶を迎える一九一〇年にかけての関係性（部分的には一九三〇年代にいたる関係性）の変化を時系列的に再構成することにある。愛憎相半ばする三者の関係が明らかにすることで、クラウスとフロイトの関係が悪化していく過程を記述し、両者の伝記的研究の空白部を埋めたいと考えている。

本論の第二の目的は、ヴィッテルスの議論を軸に、それをめぐるクラウスとフロイトの応答を検討することで、両者の思想の類似点と相違点を明らかにすることにある。クラウスとフロイト双方のサークルに出入りしていたヴィッテルスは、「フロイト的クラウス主義者」とでも呼ぶべき人物であった。クラウスの強い影響下で書かれたヴィッテ

ルスの論文をフロイトがどのように論評したのか、さらにヴィッテルスの精神分析的手法をクラウスがどう評価したのかを見ることで、クラウスとフロイトの思想の類似点と相違点の一端を明らかにすることが可能になると筆者は考えている。ヴィッテルスは協会での報告に対応する論文を『ファッケル』にも掲載しているため、『ファッケル』論文からヴィッテルスの報告の詳しい内容を明らかにし、協会の議事録からそれへのフロイトの反応を知ることが可能なのである。本論を通じて、クラウス⇨フロイト関係の変化を時系列的に追うと共に、両者の理論的な対立を、ヴィッテルスといういわば二人にとつての「不肖の息子」の議論を軸に据えながら見ていく。

## 二 クラウス⇨フロイト⇨ヴィッテルス——三者関係の変化

### (一) 「二人の父」との出会い

ヴィッテルスとクラウスの直接の個人的関係は、一九〇六年末に「自分の小説はどれ一つとしてストリンドベリにそれに引けは取らない」という自尊自大な手紙を、自作の小説を同封して、クラウスに送りつけたことに始まる(Memoirs, 45-47)。クラウスはこの若者の原稿を受け入れ、一九〇七年二月に『ファッケル』に掲載した(Ep18: 14-20, 1907)。だがヴィッテルスとクラウス、さらにフロイトを近づけたのは、むしろこの次の号にアヴィセンナという筆名で投稿した社会批判的な医学論文「刑法の最大の犯罪(墮胎の禁止)」(Ep19: 1-22, 1907)であった。ヴィッテルス自身、この論文を「フロイトの発見とクラウスの哲学」に基づくもの、と呼んでくる(Memoirs, 45)。

同論の中でヴィッテルスは、胎児は刑法犯罪を構成するような法人格とは認められないと主張し、子を持ちたくない母親あるいは望まない妊娠をってしまった女性を非難すべきではないと述べる。ヴィッテルスはハプスブルク帝国

で墮胎が禁止されている理由を、教会⇨国家⇨資本の結びつきに見て、「教会はキリスト教徒を、軍国主義は新兵を、資本主義はクローリーを必要としている、それも無力なそれを」と主張する (F219:12)。彼の主張とは、望まない妊娠の結果貧困の中に生まれる多数の無力な人民を、教会⇨国家⇨資本が欲しているからこそ墮胎が禁じられている、というものであった。

加えてヴィッテルスは母体の健康のための墮胎の可能性を論じる。これは結核や心臓病など出産に耐えられない身体的女性を配慮した意見である一方で、妊娠イコール出産という不安から女性を解放するという意図を持った議論でもあった。ヴィッテルスは妊娠の恐怖を助長する墮胎の禁止が、性生活への不安、「性的悲惨 (sexuelle Not)」（F219:18）の原因であると考えていた。

墮胎が法的に禁止されていることで、女性には医師によつて適切な処置を受けることができず、もぐりの医師に身体を傷つけられたり、出産後の子殺しに及ぶこともある。それゆえヴィッテルスには中絶を認めない国家を「ろくでなし (Oberlump)」（F219:20）と非難し、墮胎を犯罪として懲役刑を定めた刑法第一四四条以下の改正を求め、「いかなる女性も出産を強制されえない」と訴えた (F219:12)。

ヴィッテルスによると、この論文がきっかけとなつて、彼はフロイトの個人的な知己を得る。もともと彼は一九〇六年春から勤務先の病院でのフロイトの講義に参加していたが、『フアッケル』での論文を読んだフロイトが講義の後、出席者の一人であるヴィッテルスに自ら声をかけ「これは君が書いたのかい。これはまるで声明文のようだが、私はこのすべての文章に同意するよ」と賞賛したという (Memoirs, 32-33, 48)。そして論文発表から一ヶ月ほど経つた三月二七日にヴィッテルスは、叔父のイジドル・ザドガーの推薦もあつて、ウィーン精神分析協会に加盟した (Protokolle I, 138, 145)。

同様に、この論文の発表以降、ヴィッテルスはウィーンのコヒーハウスにたむろするクラウスのサークルにも迎

え入れられ、カール・ハウアーやルートヴィヒ・フォン・ヤニコウスキーといったクラウスの友人たちに紹介された。彼の論文はクラウス・サークル内部でも評判が良く、クラウスも同じく墮胎をテーマにしたエッセイを三月に刊行した『ファッケル』に執筆し（Fp21: 19-20, 1907）、劇作家のフランク・ヴェデキントも六月に雑誌『モルゲン』に発表したエッセイ<sup>(16)</sup>の中でヴィッテルスの論文に肯定的に言及している（クラウスとヴェデキントは友人で、一九〇五年にウィーンでヴェデキントの戯曲『パンドラの箱』を上演するのに際しクラウスは積極的に協力し、自らも端役で出演した<sup>(17)</sup>）。

そのエッセイの中で、ヴェデキントは、ハプスブルク帝国同様に墮胎を禁じるドイツ帝国の刑法第二一八条を、「女性の身体の内奥を男性的冒険心の所有物として刑法によって囲い込もう」とする試みであると批判し、『ファッケル』において、フリッツ・ヴィッテルス博士が胎児に対する犯罪の処罰について詳しく論じているので、女性の独立運動の前衛たちはぜひこの議論を自分たちの闘いの歌にまで高めていただきたい」とヴィッテルスに好意的に論じた<sup>(18)</sup>。クラウスはこのエッセイを『ファッケル』で紹介し（Fp29: 21-22, 1907）、ヴィッテルスと連名で謝辞を記した<sup>(19)</sup>はがきをヴェデキントに送っている。

だがこの「中絶の合法化」という、一見リベラルなフェミニズム運動に加担したかに見えるヴィッテルスの議論は、リベラリズムとはいささか異なる思想的源泉から湧き出てきたものであった。そうであるがゆえに、彼の議論はヴェデキントやハウアーらクラウス・サークルの面々に好意的に受け入れられた一方で、フロイト・サークルの面々からは不審の念を持って見られるようになる。そしてその思想的源泉とは、世紀転換期のウィーンに特徴的な「性的存在」、「ヘタエラ（Hetäre）」<sup>(20)</sup>としての女性観であった。

## (二) フロイトのヴィッテルス＝クラウスへの違和感

フロイト・サークル内におけるヴィッテルスへの違和感は、早くも一九〇七年春に顕在化する。精神分析協会に加

入早々、ヴィッテルスは四月に「タートヤナ・レオンティエフ」、五月に二週連続で「女医」、「偉大なヘタエラ」と三回にわたって報告を行い、独特の女性心理学を展開した。簡単にそれぞれの内容とそれに対するフロイト・サークルの反応を見ていこう。

最初の報告タイトルにある「タートヤナ・レオンティエフ」(Protokolle I, 150-156)とは帝政ロシアの高官を暗殺しようとしたテロリストの名前であるが、報告に対応する『フアッケル』所収の論文タイトルが「女暗殺者たち」(F246:26-38, 1908)となっていることからわかるように、これは歴史上の女性暗殺者たちを精神分析した報告であった。ヴィッテルスは旧約聖書の『士師記』におけるヤエル、同じく旧約(外典)の『ユディト記』におけるユディト、フランス革命時にマラーを殺したコルデ、そしてレオンティエフを例に挙げ、彼女たちをみな性的抑圧によるヒステリー患者だと分析してみせる。しかも旧約の二つの事例においては、彼女たちが予期した性的満足を与えられなかったからこそ、ヤエルはシセラを、ユディトはホロフェルネスを殺したのだと解釈する。またヴィッテルスによると、暗殺者が使った凶器、すなわち釘(ヤエル)、ナイフ(コルデ)、リボルバー(レオンティエフ)は、いずれも男性の生殖器を象徴するものである。他にもヴィッテルスはユディトやレオンティエフに見られる父親コンプレックスを指摘してみせた。

この報告に対し、フロイトはヴィッテルスの議論とは「抑圧されたエロティック」が女性暗殺者に武器を持たせたという解釈で、暗殺者の心理学をきわめて正確に明らかにしている、と賞賛している。そして女性の暗殺者は、拒絶された愛を憎しみに「転位(Verwandlung)」したのだ、と説明を加えた。<sup>(2)</sup> こうした師のほめ言葉に後押しされたヴィッテルスは、討論の最後にも発言し「女性が行い、感じるあらゆることの中には性的なものがあります。それゆえこれらの行為はイデオロギー的には説明つきません。われわれは意識というちっぽけなかけらを過大評価すべきではないのです」(Protokolle I, 156) と付け加えた。

この議論の一ヶ月後、精神分析協会はヴィッテルスが『ファッケル』に掲載した論文「女医」(F225: 10-24, 1907)の合評会を行った (Protokolle I, 189-186)。この論文においてもヴィッテルスは「女暗殺者」と類似の議論を展開し、女医とは性的欲求を性的目的から学問にそらしたヒステリー患者である、と論評する (F225: II-12)。彼に従えば、女性は学問的に優秀であればそれだけヒステリーだ、ということになる。それゆえフェミニストを自称し、学ある女に魅力を感じるような男は「マゾヒスト」である。彼はこうした「女医」とは異なる、性的存在としての女性を「女 (Weib)」と呼び、現代社会で女らしくあることは「遅れてきたギリシア女 (nachgeborene Griechin)」であることを意味すると述べる (F225: 24)。そしてこうした「真の女らしさ (wahre Weiblichkeit)」を許容しない世界で生きざるをえないことは、彼女たちにとって不幸なことである、と結んでいる。

この議論は精神分析協会の面々からかなり厳しい批判を加えられた。例えばエドゥアルト・ヒツチュマンは、ヴィッテルスの議論は性的なものを過大評価しており、いわば「性交するゆえにわれあり (coito ergo sum)」と主張するようなものだ、と述べる<sup>(22)</sup>。ヴィッテルスは「遅れてきたギリシア女、ヘタエラ」を理想視しているようであるが、彼は「実際のギリシアの話というより、ウィーンのギリシア通り「当時の売春街」の話をしているに過ぎない」。すなわち彼の議論は同時代の売春婦を理想視する議論に過ぎない、とヒツチュマンは喝破したのである (Protokolle I, 189-186)。

同じくフロイトも、ヴィッテルスの議論に若干の賛意を示しつつも、彼の議論には半分あるいは四分の一の真実しか含まれていないことを指摘する。学問の原動力にセクシュアリティが関わっていることは確かであるが、ヴィッテルスは「昇華されたセクシュアリティ」と「むき出しのセクシュアリティ」を区別できていない。そしてフロイトは次のように付け加えた。

ヘタエラ理念はわれわれの文化には必要がありません。われわれはセクシュアリティの探究にいそしみますが、それが明らかになった後で、性の抑圧全体を意識化し、それを文化に従属させることを求めるのです。われわれは抑圧 (Verdrängung) を通常  
の抑え込み (Unterdrückung) に置き換えることを試みてゐるのです (Protokolle I, 187)。

すなわちヴィッテルスが「セクシュアリティ」という女性の本質(と彼が考えたもの)の解放を訴えたのに対して、フロイトはその文化への従属、神経症を発生させないような形でのセクシュアリティの抑え込みを訴えたのである。フロイトはヴィッテルスが理想視するヘタエラなど「ルンペン (Haderlump)」のようなものに過ぎないと切つて捨てた。ヴィッテルスはこの発言に「非常にショックを受けた」が、それは彼の目的が「男と女の根本的な相違」を世界観的に示すことであつたからだつた。

この合評会の翌週に、続けてヴィッテルスが発表したのが「偉大なヘタエラ」であつた。同報告は協会の議事録に残されていないため、内容は『ファッケル』に掲載された「子ども女 (Kindweib)」(F230: 14-33, 1908) から推測するほかない。ヴィッテルスが「女医」報告の続編と呼ぶこの報告は、「女医」以上に問題含みのものであつた。

「子ども女」とは、知性は足りないが、愛に関しては経験豊かなものを凌駕する存在である (F230: 15)。彼女は自然的に無恥な人間で、「原女 (Urwild)」と呼ぶことができる。だが彼女は「現実世界に必要なもの (Notwendigkeit) を理解しない」(F230: 17)。それゆえに「子ども女は市民的・倫理的意味においては娼婦」「ヘタエラ」であり、社会敵対的な「犯罪者」。「ルンペン」である(ヴィッテルスはここであえてフロイトが「女医」報告を批判する際に使用した「ルンペン」という単語を用いる)。「この原女が社会において地位を占めるためには美の宗教が必要である。しかし道徳宗教は美を軽蔑し、娼家へと追いやる」。ヴィッテルスは自身が理想視するこの「子ども女」の居場所がない同時代のウィーン社会を批判すると同時に、フェミニストが女性選挙権など女性の男性化を求めていることを批判し、

「子ども女」としての女性の解放を求めた (F230: 32-33)。

こうしたヴィッテルスの議論は、クラウス・サークルの影響を受けたものであった。当時クラウスは女性を「性的存在」として捉え、あえて「女性 (Frau)」ではなく「女 (Weib)」という表現を好んで使った<sup>(24)</sup>。そしてヴィッテルス同様に古代ギリシアの女性観を理想視し、ちょうどヴィッテルスの「子ども女」論文が載る前号の『ファッケル』では「人類は、ギリシアの青春時代の決定的な性的印象をひどく抑圧されたことで、中世にヒステリーになってしまった」(F239: 4, 1907) という自作のアフォリズムを掲載している。また男女同権を求めるフェミニズム運動を茶化し、フェミニズムは「女性の政治的選挙権」ばかり重視し、「女性の性的な選挙権の剥奪には同意する」(F211: 20, 1906; 傍点引用者) と批判を加えた。

クラウスは友人ヴェデキントの戯曲『パンドラの箱』の上演を支援したが、ヴィッテルスは「子ども女」の例としてまさにこの『パンドラの箱』の主人公「ルル」の名を挙げている (Memoirs, 73)。「ルル」こそ「災いの種を蒔き、人間を惑わし、誘惑し、毒を盛り——それと気づかずに相手の男を殺す」ために創造された女<sup>(25)</sup>、世紀転換期のアヴァンギャルドたちに理想化された「ファム・ファタール」の典型であった。そしてクラウス・サークルではこの「子ども女」を擬人化したようなイルマ・カルツェウスカという女性もてはやされ (彼女もウィーンで上演された『パンドラの箱』に出演している)、彼女は一妻多夫的な女性として当時クラウスとヴィッテルスの共通の恋人役を務めた (Memoirs, chap. 5)。

問題は、こうしたクラウス・サークルでもてはやされているような女性観を、フロイトも共有していると思ひ込んだヴィッテルスの誤解<sup>(26)</sup>にあった。当時彼はクラウスとフロイトをウィーンにおける「性的自由の闘士」とみなし、両者の間にある「すさまじい相違」に気づかなかった (Memoirs, 48)。フロイトはあくまで事実の記述を行う科学者であって、社会改革家でも伝道師でもなかった。後にこうした師に対する誤解を反省したヴィッテルスは、『自伝』の

中でフロイトを次のように評している。

フロイトは實際抑圧された性生活の解放者になってしまった——それは彼の運命だった——が、しかし彼はある意味、自ら意志せずに、あるいは自分の意志に反してそうなってしまったのだった (Memoirs, 48-49)。

ヴィッテルスはここでフロイトを、教会を攻撃する意図はなかったのに彼のなした「発見」ゆえに教会に責められることとなった、コペルニクスに比している。

自分の弟子がこうした誤解をしていることに気づいていたフロイトは、「私の意図は世界を抑制なき狂乱へと導くことではなく、反対に、人々が自らの本能をたくさんの多かれ少なかれ神経症的な偽装で充足させることの無いように教示することなんだ」とヴィッテルスをさとした (Memoirs, 62)。また時代は下るが、一九〇八年の秋にヴィッテルスがここまで本論で取り上げた論文すべてを含む論文集『性的悲惨』を刊行した際に、フロイトは協会の討論の材料に同著を取り上げ、ヴィッテルスの前で次のように明快に自身の立場とクラウスの立場の相違を定式化している。

ヴィッテルスの本は、二つの異なった源泉、父方と母方二つの源泉にその起源を持っています。第一の源泉は『ファッケル』で、セクシュアリティの抑え込みがさまざまな問題の原因であるという主張において、一部われわれと一致します。しかしわれわれは、次のように主張することでさらに前に進むのです。すなわち、われわれは治療によってセクシュアリティを解放しますが、それは人間がセクシュアリティに支配されるためではなく、抑えこみを可能にするため、すなわちより高度な審級から欲動の拒絶を可能にするためなのです。『ファッケル』は「本能的生活の」解放を擁護します。われわれは抑圧の病理学的過程と通常と思われる過程の区別を行うのです。病理学的なそれは、もちろんわれわれも拒否します (Protokolle II, 81)。

クラウス・サークルの影響を受けたヴィッテルスが、性的抑圧を除去し性生活を解放すれば神経症は消滅すると単純に構想していたのに対し、フロイトは抑制なき性生活はそれ自体病理学的であると考えていた。フロイトは自らの弟子に対するクラウスのこの「悪影響」を苦々しく思っていたようであり、それは両者の関係の冷却化の一因になった。

だが一方でクラウスの側も、ヴィッテルスが開陳してみせるかなり乱暴な精神分析には違和感を持っていた。このフロイトの「弟子」に対する違和感は、次第にそうした弟子を放任する「師」に向けられるようになる。ここで節を変えて、クラウスが精神分析のどういった側面に違和感を持っていたのかを詳しく見ていこう。

### (三) クラウスのヴィッテルス⇨フロイト⇨精神分析への違和感

一九三一年にニューヨークで刊行した『フロイトとその時代』の中で、ヴィッテルスはウィーン時代のあるエピソードを次のように回想している。

今から二五年ほど前、まだ精神分析が揺籃期にあったころ、ある——当時はまだ若かった——精神分析医が、著名な芸術批評家にして芸術愛好家である人物に手紙を書いた。(中略) 若き分析家はその手紙の中で、自分がゲーテの詩『魔法使いの弟子』の思いもよらない含意を見出したと述べた。彼によると、その詩が扱っているのは父と息子、早熟な性的行為、想像力と恐怖、夜尿症のことだというのだ。しかし分析家は間違った門をたたいてしまった。というのもこの愛好家は、これこそ精神分析の没落の運命を証するに十分なものであるとして、この手紙にコメントを付して公表してしまっただけである。<sup>(28)</sup>

いうまでもないことだが、この若き精神分析医とはヴィッテルスのことであり、芸術愛好家とはクラウスのことだ。

ある。確かにクラウスはその二五年前の『ファッケル』において、読者から、「魔法使いの弟子」の意味とは、〈解き放たれた自慰的欲動の災い〉以外の何ものでもない」という投稿があったことを記載している (Fl 196: 20, 1906)。だがここでクラウスはヴィッテルスの名を挙げておらず、精神分析批判を行っているわけではない。他のもつとひどい個人攻撃のような投稿に比べて、これは「気分転換」になるものだ、という形で言及しているのである (ヴィッテルスは次に紹介する一九〇八年の批判と、この一九〇六年の『ファッケル』の記憶を混同していると思われる)。

とはいえ、クラウスとヴィッテルスの関係が『魔法使いの弟子』の解釈をめぐって始まったということは、後世の視点から見ると非常に暗示的であるといえる。なぜならクラウスのヴィッテルス批判、精神分析批判は後に『魔法使いの弟子』をキーワードとして展開されていくことになるからである。

時系列的な説明に戻ると、クラウスとヴィッテルスは当初友好な関係を続け、一九〇七年の夏には共通の恋人イールマとヴェニス旅行に出かける。クラウスの悪影響を心配するフロイトから何度か警告は受けたものの、辛辣な批評家であるクラウスに「現代ドイツ最高の作家」とまで褒められ舞い上がるヴィッテルスは、フロイトの苦言に耳を貸さなかった (Memoirs, 81)。宵つ張りのクラウス・サークルの面々との付き合いもあつて、ヴィッテルスは勤務先の病院をやめ、一九〇八年一月にウィーン中心部グラーベンに個人医院を開院する。一九〇八年にも五本の作品を『ファッケル』に投稿しているが、五月に刊行された第二五四号がヴィッテルスの作品が掲載された最後の号になる。この年の秋にヴィッテルスが絶交の手紙をクラウスに送ること、両者の関係は絶たれることになるのであるが、この五月の『ファッケル』と秋の絶交書簡の間——すなわち両者の関係が急速に冷却化した期間——に刊行された『ファッケル』第二五六号において、クラウスは『魔法使いの弟子』<sup>30</sup> 解釈を軸に精神分析批判を展開したのである。

クラウスはここで「精神医学者」を「偉人たちの著作をただセクシュアリティの観点からのみ吟味しようとする人々」と呼び、「かつてそのうちの一人が私に『魔法使いの弟子』をその作者の自慰的傾向の明白な証拠と解釈して

みせた」ことを紹介する (P256: 21, 1908)。このヴィッテルスの解釈に対し、クラウスは「私は『魔法使いの弟子』の堅固な解釈があることを知っている」と述べ、当のゲーテの詩を引用しながら自ら注釈を加え、それを精神分析の師 (＝フロイト) とその弟子の問題として、以下のように解釈してみせるのである。

「とうとう出かけたぞ／魔法使いの老師！／手下の霊どもは／おれの言うとおりに動くんだぞ！」。性病学的認識の発見者にして功績の多い師の居ぬ間に、彼の弟子の一人がその方法を自ら使ってみようと試みる。「呪文も手振りもやり方も／ちゃんと見習っておぼえてある／なに、おれだって念力で／見事、奇跡を現じてみせましょう」。そして彼はゲーテの詩を台無しにする。注釈は彼の手には負えないのだ。「鉢という鉢が／水でいっぱい」。災禍に気づくのが遅すぎた。「元の筥になつてくれんか!」。つまりは彼が無思慮に設定したなにかではなく、筥にということだ。しかし覆水盆に返らず、注釈は留まることを知らない。明確な対象を意味していた古典作家の言葉——テルの籠にある最後の矢、黄金の鳥、さすらい人が山で見つけたアンモンの角——は解釈の前にもはや確かなものではない。「ああ恐ろしい水の嵩!」。とうとうフロイト教授が戻ってきた。「先生、困り果てました／私の呼び出した霊どもが／どうしても去んでくれませぬ」。教授は弟子が教説を貶めているさまを見て、乱暴狼藉をやめさせる決意をする。今がそのときだ。筥のように見えたもの、なにかほかのものを意味するものはすべて隅っこに戻れ。「それぞ汝らの未来／霊として汝らを／その用に呼び出すのは／老師のほかにはあり得ぬのだ」 (P256: 22-23)。ゲーテの詩は高安国世訳<sup>(31)</sup>を一部変更。

重要なことは、クラウスがこの時点で批判していたのは「師」フロイトや精神分析それ自体ではなくて、あくまでも「弟子」によるその理論の芸術作品への「乱用」であったということだ。ヴィッテルスの『魔法使いの弟子』解釈にとどまらず、クラウスはマックス・グラーフ (音楽学者で、フロイトの有名な患者「小さなハンズ」の父) の『さまよえるオランダ人』解釈 (F376-377: 20-21, 1913)、ザドガーのクライスト論やレーナウ論 (F300: 27, 1910) を厳しく批判

した。クラウスは芸術作品の成り立ちをヴィッテルスのように性的なものに還元したり、グラーフのように父親コンプレックスに還元したりするような、精神分析の一元論的適用に強い不信感を持っていた。<sup>(32)</sup> ヴィッテルスの解釈に対しては「たとえ世界中が自慰に励んでも『魔法使いの弟子』という作品は生まれに違いない」(F256: 22)と皮肉り、グラーフに対しては父に取って代わりたいという願望をすべての男性が持つのだとしたら、なぜワグナーという一人だけが『やまよえるオランダ人』を書けたのか、精神分析はその理由を説明する義務があると迫る (F360-377: 21)。

時代は下るが、クラウスは一九一二年末に発表した論文「黒魔術による世界の没落」の末尾で、彼が批判する黒魔術(＝プレス)と並べて精神分析を批判した。自らの進歩主義的な立場を絶対視し世論を操作しようとするプレスと、ゲーテの詩を「夜尿症の昇華」であると自らの理論で一元論的に解釈しようとする精神分析を、クラウスは等置しているのである。クラウスはプレスや精神分析がはびこる時代を「才覚を持った時代」と呼び、それが「精神」に反抗していると述べる (F363-365: 27, 1912)。クラウスにとって「才覚 (Talenti)」とは、「根源」から乖離した同時代の知性の有様を示す非常にネガティブな含意を持った言葉であった。<sup>(33)</sup> さらに翌一九一三年に発表した「無許可の精神分析」(F387-388: 17-22, 1913)でも、精神分析によるグリルパルツァーやレーナウの作品解釈、そしてまたもやゲーテの『魔法使いの弟子』解釈を取り上げ、反ユダヤ主義的言辞を交えてまで精神分析を批判する (F387-388: 22)。クラウスにとっての問題は、「どんなときでも正しい」精神分析の不謬性 (F241: 21, 1908)であり、精神分析からの「逃れがたさ」(F387-388: 20, 1913)、すなわち包括的な教説ですべてを一元論的に還元しようとするその理論の暴力性にあった。

フロイトの浩瀚な伝記を著したピーター・ゲイによると、「神経症の原因に関する精神分析医の解釈に対し、患者がその解釈を肯定した場合はそのまま肯定とみなし、反対に否定した場合もその解釈の抑圧された肯定とみなす」、

というような分析医の態度は、フロイトとクラウスの同時代にすでに問題視されていた。なぜならこれでは精神分析とは「表裏どちらが出ても私の勝ち (Heads I win, tails you lose)」といういんちき賭け事に等しくなってしまうからである。<sup>(34)</sup> 同じくウィーン人カール・ポパーも、カール・マルクスの歴史理論やアルフレート・アドラーの個人心理学と並べてフロイトの精神分析学を批判し、その問題点として正反対の人間の行動を一つの理論で説明するその包括性、そして反駁不可能性を指摘している。<sup>(35)</sup> クラウスのヴィッテルス＝精神分析への違和感とは、当時すでに多くの精神分析批判者が共有するものであった。

そして一九〇八年当初はあくまで「弟子」による「理論の乱用」に向けられたものであったこの批判は、このように「弟子」を統御できない「師」へも次第に向けられるようになる。その契機になったと考えられるのが、ヴィッテルスによるクラウスの精神分析「ファツケル・ノイローゼ」であった。そして結果的にこの報告によって三者の関係には決定的なひびが入ることになる。ここで節を移して、一九〇八年秋のヴィッテルスによるクラウスへの絶交状の送付から、一九一〇年冒頭の「ファツケル・ノイローゼ」報告とその余波、さらに同年秋の『エゼキエル』刊行によるヴィッテルスの精神分析協会からの除名に至る過程を詳しく見ていこう。

#### (四) 三者関係の破局——一九一〇年

一九〇八年六月に出た『ファツケル』第二五六号で批判を受けた後も、ヴィッテルスは夏季休暇中にクラウスを旅行に誘うなど表面的には友好的であったが、両者の関係は次第に冷却化していく。この頃ヴィッテルスは、秋に刊行予定の二冊の本の校正を進めていた。そのうちの一冊である『性的悲惨』のゲラをヴィッテルスは夏休み中のフロイトの別荘に持参し、その序文をフロイトの前で朗読した。ヴィッテルスが、同著に「わが師ジークムント・フロイト教授に、心からの敬意をこめて」という献辞を付ける許可を師に求めたとき、フロイトは「クラウスはこの献辞を自

分への攻撃とみなし、君に復讐するだろう」と不吉な予言をする (Memoirs, 87)。フロイトの危惧には根拠があり、『性的悲惨』はそもそも初出が『ファッケル』の論文の多くを所収したもので、その巻頭のエピグラムにも「セクシュアリティを解放 (unleash) させられなければ、人は不具になる」というアフォリズムを掲げた「精神においてクラウスにはるかに近い」著作であった。<sup>(36)</sup> にもかかわらず、ヴィッテルスは同著をフロイトに捧げたのである。またもう一冊の著書である創作集『古い恋の物語』に、ヴィッテルスはあえて「親愛なる一九〇七年のカール・クラウスに」という献辞を付けた。これは悪化するクラウスとの関係を暗示するものであった (Memoirs, 90)。

ヴィッテルスは『自伝』に、同時期にクラウスがサークルの面々に語って聞かせた、クラウスが見た象徴的な夢の話を書き記している。その内容は以下のようなものだ。

ある日クラウスが友人たちと一緒にいると、彼らの前を幾人ものクラウスの敵が連行されていった。皆がその敵に対して嘲笑と軽蔑を露わにしたが、クラウスの「不倶戴天の敵」である『ノイエ・フライエ・プレッセ』の編集長ベネディクトがやってきたとき、仲間のうちの一人だけが輪から外れ、ベネディクトに近づき、彼に頭を下げた。その人物こそヴィッテルスだった (筆者による要約。Memoirs, 83-84)。

精神分析医であるヴィッテルスはこの夢から、クラウスが自らに対して持つ潜在的な悪感情を読み取った。ヴィッテルスは何度かクラウスになぜ自分に対する態度が変わってしまったのか尋ねたが、クラウスは「変わったのは僕じゃなくて君のほうだ」と冷たく言い放つのみだった (Memoirs, 90)。

そして一九〇八年一月、冷却化するクラウスとの関係に耐え切れなくなったヴィッテルスは、シェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』におけるブルータスの演説をもじりながら、あなたのことを尊敬し、愛しているがもう

コーヒーハウスには顔を出さない、とクラウスに絶交の手紙を書く (Memoirs, 90)。ヴィッテルスとしてはクラウスがヴィッテルスの気持ちを含んで、すべてを水に流し、友人関係に戻ることを期待したようである。それゆえ絶交の手紙を書いた後も、彼はクラウスに仲直りを求める手紙を書いている (後述するように、これが大失敗だったことを後にヴィッテルスは思い知る)。だがクラウスはヴィッテルスのそうした願いを無視し、一月末に出した『ファッケル』で「個人的な問題」と題したヴィッテルス批判のアフォーリズム集を発表した (F&G: 14-28, 1908)。そしてヴィッテルスの名前こそ明示しなかったものの、先述の自身が見た夢の話に掲載し、「剽窃者」、「寄生虫」といった言葉で彼のことをほめかして批判を展開した。その中には、ヴィッテルスはブルータスの名には値しない人間である、と絶交の手紙を揶揄するような内容のものも含まれている。名指しこそしなくとも、この『ファッケル』は、ヴィッテルス本人、そしてクラウス・サークルの面々には明らかなクラウスによるヴィッテルスへの絶縁宣言と映った。<sup>(37)</sup>これに対し、ヴィッテルスはクラウスへの「復讐」を誓い、精神分析的手法による「人格攻撃」と「諷刺小説の発表」という二つの手段を選<sup>(38)</sup>ぶ。だがこの復讐は期せずしてヴィッテルスとフロイト、さらにはクラウスとフロイトの関係をも破壊することになるのである。

ヴィッテルスがこの復讐の準備をしていた一九〇九年は嵐の前の静けさともいえるべき状況で、クラウスの精神分析批判もフロイトの弟子に対するものに留まる。そして翌一九一〇年初頭、一月一二日にヴィッテルスは「ファッケル・ノイローゼ」(Prookolle II, 346-356)と題したクラウスに対する精神分析をウィーン精神分析協会で発表した。

冒頭ヴィッテルスは、同報告の課題は「芸術と神経症」の関係、とりわけクラウスにおけるその関係である、と述べ、クラウスの活動を時系列的に三つの段階に分ける。第一は「ジャーナリスト」になるべき人間が不意に「反腐敗主義者」になった段階であり、第二は彼の関心が「セクシュアリティ」の問題に移行し、精神分析に近づいた段階、そして第三はクラウスが最終的に「アフォーリズム作家」になった段階である。

まずヴィッテルスは、第一のクラウスが反腐敗主義者になった問題を、エディプス・コンプレックスに由来するものと解釈する。彼によると、クラウスが批判したウィーンを代表する日刊紙『ノイエ・フライエ・プレッセ』とは「父親の新聞」、「父親の器官」を意味し、それに対し『ファッケル』とは子どもの器官、「小さな器官」を象徴している。クラウスの父の名前は「ヤコブ (Jakob)」であるが、これは「祝福されたもの」を意味し、ウルガタ訳聖書だと「ベネディクトゥス (Benedictus)」にあたる。クラウスが攻撃する人物には、『ノイエ・フライエ・プレッセ』の編集長ベネディクト (Benedikt) などBがつく人間が多い。それゆえ彼の『ノイエ・フライエ・プレッセ』とベネディクトに対する攻撃とは「神経症の態度」を意味し、「彼のこの神経症的な憎しみを理解するには、あらゆる神経症の起源と出発点にはエディプス・モティーフがあることを思い出すだけでよい」とヴィッテルスは主張する (Protokolle II, 347-349)。

次にヴィッテルスは、クラウスが第二の段階の問題であるセクシュアリティの問題に関心を持った理由として、ウィーンの女優アニー・カルマーとの恋を挙げ、クラウスがアニーの「不実」に悩んでいたことを強調する。当時の女優業には売春まがいの行為が付き物だったからである。クラウスは彼女への愛と不実への悩みの思い出を、アニーのようなタイプの女性を理想化することで克服した。そして「男性の精神的天才性」を「女性の美的天才性 (性的天才性)」と対置するにいたった。<sup>(40)</sup> この亡き恋人の思い出の克服というクラウスの神経症的な営みは、偶然にもいくつかの点でフロイトの発見に一致した。その上でヴィッテルスは両者の違いとして、クラウスは最終的に「誰にでも身をささげる女以外はみんなヒステリーだ」とまで主張するようになったが、フロイトは「そのような人生観は母親の過大評価の反転、そして愛における失望を示す」ものであることを示した、と指摘する。この報告の段階でヴィッテルスはあれほど影響を受けたクラウスのな女性観をフロイト的な観点から批判し、さらにはそれを神経症に由来するものである、と解釈してみせたのだ (Protokolle II, 349-350)。

そしてヴィッテルスは自身とクラウスとの関係は、この第二期で終わりを告げたと宣言する。彼にいわせると、クラウスの第三期とは「芸術家的不毛性」の時代である。クラウスは形式を「性化」し、「何を書くか」ではなく、「いかに書くか」のみにこだわるようになった。それは彼の作品の多くがアフォーリズムという形で発表されるようになったことから明らかである。そしてヴィッテルスは結論として、「いかに神経症から芸術が生まれ、芸術から神経症が再び生まれるか」をクラウスの事例は示していると締めくくった (Protokolle II, 350-351)。

以上のようなヴィッテルスの報告に対し、フロイトはまず「この報告は現存の人物を扱っています。分析は寛容な態度で行われるべきですし、生体解剖のようなことは非人間的との非難を免れえないでしょう」と注意を促す。そして「われわれ『精神分析医』は、重要な作品を問題にするときに、神経症を前面に押し出す権利など持っていないということをしばしば忘れがちです」と協会のメンバーの前で安易な精神分析の利用を戒めた。その上で、自らとクラウスの関係について語り、自分はヴィッテルスに会う前からクラウスと知り合っていたこと、彼はきつと精神分析の擁護者になってくれるであろうと期待したことを率直に述べる。だがこの期待は誤りだった。確かにクラウスは偉大な才能を持っているが、彼にあまりに自制心に欠け、自らの欲動に身を任せてしまっている、とフロイトは批判した (Protokolle II, 354-355)。

冒頭で述べたように、フロイト研究においてこの報告は悪名高い。アーネスト・ジョーンズのフロイト伝に典型的なように、同報告がフロイトとクラウスの関係を破局に導き、クラウスがその「復讐」として激しい精神分析学批判を始めるきっかけになった、と考えられたからである。だが上述の『魔法使いの弟子』<sup>(4)</sup> 解釈をめぐる論争に見られるように、クラウスの精神分析学に対する違和感が一九〇八年の段階で公表されていることから、このジョーンズの見解にはクラウス研究の側から多くの批判が寄せられてきた。<sup>(4)</sup> クラウスの精神分析批判をそうした「私怨」に還元することは、彼の批判が持つ含意を無視することになるからである。またそもそも、クラウスはヴィッテルスがこの報告

を行ったことをいつ知ったのか、ということ自体が定かでない。クラウスが一九二三年に書いた書簡から、彼がこの報告の内容を把握していたことは間違いないが、それが報告直後だったのかある程度の期間を置いてからだったのか、そしてどこからクラウスがこの情報を仕入れたのかは明らかになっていないのだ。

ただ筆者の見解としては、クラウスは早い段階、すなわち一九一〇年の春先までには詳細な内容は知らないまでも、少なくとも自分を中傷するような報告が行われたことを知っていたのではないかと思われる。例えば、クラウスはベルリンの編集者ヘルヴァルト・ヴァルデンに宛てた一九一〇年二月二日付の書簡の中で、自分がウィーンで「ある愚か者」により「不快な心配事、揉め事」に巻き込まれていると記しているが、この「愚か者」とはヴィッテルスを意味し、「不快な心配事、揉め事」とは「ファッケル・ノイローゼ」をめぐるフロイト・サークルとの対決を意味すると考えられている<sup>(8)</sup>。また、前節で紹介した一九〇八年のクラウスの批判があくまで「弟子」に向けられていたものであったとすれば、一九一〇年の批判は明らかに精神分析全体に向けられるようになった。四月九日に刊行された『ファッケル』で、クラウスは「精神分析とかいうものは、世界におけるすべてのものを、自分たちだけは例外として、性的原因へと還元する好色な合理主義者たちの活動のことだ」(Ego: 26) という冒頭で引用した辛辣な精神分析批判を行う。

そしてたとえこの筆者による想定が間違っていたとしても、重要なことは一九一〇年のフロイトが、クラウスによる精神分析学へのこうした攻撃をヴィッテルス報告への復讐であると思、い、込、ん、で、いた、こと、だ。例えば同年二月、『ファッケル』第二九四号が出た直後、フロイトは弟子のフェレンツィに次のように書き送っている。

ヴィッテルスの「ファッケル・ノイローゼ」報告のせいで、精神分析学は『ファッケル』の不快な攻撃にさらされています。あなたもこの才能ある野獣K・K「カール・クラウス」の際限なきうぬぼれと手に負えなさはご存じでしょう。(中略)『ファッケル

ル」が持つ影響力は、積極的な意味でも消極的な意味でも非常に不愉快なものです。<sup>(4)</sup>

さらに同年四月、『ファッケル』第三〇〇号の刊行直後<sup>(5)</sup>、四月一三日の協会の会合においてはなんと「クラウス問題」が議題に上がっている (Protokolle II, 439)。アドラーは協会員に静観を呼びかけ、フロイトも「私的にであってもこの件については話題にしない」よう念を押しした。その上で「ウィーン精神分析協会にとって〈クラウス問題〉なるものは存在しないのだ」と強調した。フロイトからすれば、せっかくクラウスとは付かず離れずの関係を続けていたのに、ヴィッテルスが余計なことをしてくれた、との思いであったろう。一九一〇年になってにわかには強まるクラウスの批判を、少なくともフロイトと協会員はヴィッテルス報告への「復讐」と捉え、それを無視することで事態の鎮静化を図ったのである。ところがヴィッテルスはあえて火に油を注ぐようなことを行う。それが同年秋の暴露小説『エゼキエル』の刊行であった。

ヴィッテルスはこの小説を一九一〇年冒頭には完成させていたようであるが、クラウスは自らのサークルやイルマを標的としたこの小説の出版妨害に乗り出した (Memoirs, 95-96)。まずクラウスは知人の女性を使ってヴィッテルスの原稿のコピーを手に入れ、その内容を確認した。その上で弁護士を通じてフロイト側と連絡を取り、このような小説を出版させないよう圧力をかけた。そしてその際ヴィッテルスがいかに信用できない人物であるかを示すために、一九〇八年秋の仲違いの後に、ヴィッテルスから送られてきた関係修復を懇願する手紙を見せた。フロイトはクラウス側から聞いた小説の内容に驚くと共に、クラウスと縁を切って自分の側に来たと思っていたヴィッテルスが「二股」をかけていたことにショックを受け、出版を思い留まるよう自ら説得に乗り出す。

日付は不確かであるが、『ファッケル』第三〇〇号が出て、協会で「クラウス問題」が討議されたのと同時期に、フロイトは刊行予定の小説の原稿を読ませるようヴィッテルスに求めた。翌日、わずか一日で読み終えたフロイトは

「私は自分の意見を一言にまとめてあげよう。この本を出版しなくても君は失うものは何もないが、もし出版したら君はすべてを失うだろう」とヴィッテルスに告げた。フロイトは自分とフリースの揉め事の例なども挙げ、「理由はどうかあれ、友情が破綻したときには沈黙を守るべきだ」と出版を思い留まるよう求めた。その際、出版停止にかかる費用はすべて自分が負担する、という条件もつけたという。師の懸命の説得にそれでもなお応じないヴィッテルスに対し、フロイトはしまいに怒り出して「精神分析学はお前のくだらない喧嘩よりも大切なんだ。なんでお前のくだらん本のせいで精神分析学が痛めつけられるのを、私が指をくわえて見てなきやなんのだ」と怒鳴り、最終的には「もしこの本を出版したら、私のサークルにいることは許さん」とまで言い放った (Memoirs, 97-98)。

この後七月一日の精神分析協会が、ヴィッテルスが参加した最後の会合となる。師の説得を無視してヴィッテルスは一〇月に小説を刊行し、同月二日のフロイトのフェレンツイ宛書簡には「ヴィッテルスは小説を刊行したがゆえに協会をやめた」と記されている<sup>(47)</sup>。そして一〇月五日の協会の議事録にはヴィッテルスの脱会が記録されている (Protokolle III, 3)。一方クラウスの側も、同小説の出版差し止めを求め訴訟を起こし、両者の喧嘩はついに法廷闘争にまで至る。これによって三者の関係は断たれ、その後クラウスは精神分析学に対する散発的な批判を続け、フロイトは沈黙を維持し続けることになる。

##### (五) まとめ——三者関係の「その後」

二人の父に「勘当」された後、ヴィッテルスは医師としての仕事に戻り、一次大戦中は軍医として各戦線を転々とした。復員後は再びウィーンで精神分析医としての活動を始め、一九二三年には世界初のフロイトの伝記を書き上げ出版する。ヴィッテルスは同著をフロイトに献呈し、それを契機に両者の関係はある程度改善を始める。一九二五年には一五年ぶりにフロイトと再会し、一九二七年には「破門」を解かれ精神分析協会に再入会を許されるのである

(Memoirs, 124)。一九二八年以降ヴィッテルスは活動の軸を徐々にアメリカに移し、一九三一年には二冊目のフロイト伝を刊行した。彼はニューヨーク精神分析協会で活動する一方、ニューヨーク大学やコロンビア大学でも働き、アメリカにおけるフロイト理論の紹介者として活躍した。一九四〇年にはアメリカの市民権も獲得し、一九五〇年に同地で没している。

とはいえ、この修復された二人の師弟関係にも、クラウスの存在は最後まで暗い影として付きまとった。一九二三年、ヴィッテルスからの献呈本について書簡でやり取りする中で、フロイトは「私はあなたへのクラウスの影響をいつもよくないものだと感じ、あなたは永久に彼の虜となつて、悪影響を受け続けるのだらうと思っていました」と再びクラウス批判を行う。そして『エゼキエル』問題の最後にクラウスに対して「情愛を訴える手紙」を書いたことを忘れたのか、とヴィッテルスの「二股」を詰問した(Memoirs, 104, 105)。両者が再会し、ヴィッテルスの破門が解かれた後の一九二九年の書簡の中でも、フロイトは同じ問題を繰り返す(Memoirs, 132-133)。さらに一九三三年、アメリカに居を移していたヴィッテルスが最後にウインでフロイトに会ったとき、ヴィッテルスが旧フロイト伝の修正について話しあっていた最中、不意にフロイトは不機嫌になり、「お前はクラウスを攻撃しようとしているまさにそのときに彼に〈ラブレター〉を書いた」と難癖をつけた。さすがに「耳を疑った」ヴィッテルスは、「でも教授、それはもう二五年も昔の話ですよ」と返したが、フロイトは「わかっている、でもお前はあの時私と親しかったのに」と口ごもった(Memoirs, 143)。フロイトは、かつてヴィッテルスがクラウスと縁を切り、自分の忠実な弟子であるかのように振舞うさなかに、当のクラウスに「ラブレター」を書いたという二股を終生許すことはなかった。タイムズはこうした事実からクラウス＝フロイト＝ヴィッテルスの関係を「エロティックな三角関係」と呼ぶ<sup>(48)</sup>。弟子の忠誠をめぐって、この三者がある種の精神的な「同性愛」関係にあったことを示唆しているわけである。

一方で、クラウスとヴィッテルスの関係が修復されることはなかった。クラウスは一九二三年一月に恋人のシド

ニー・ナドヘルニー・フォン・ボルティンに宛てた手紙の中で、ヴィッテルスのことを「悪党」、「人を病気にしたてあげたがる輩 (Symptomjäger)」と罵り、「かつて私の『ノイエ・フライエ・プレッセ』への嫌悪を(父親コンプレックス)に還元した」人間と書いている<sup>(49)</sup>(これが、クラウスがヴィッテルスの「ファッケル・ノイローゼ」報告を知っていた証拠とされている)<sup>(50)</sup>。

さらに一九二五年にアプトン・シンクレアから、クラウスが一次大戦後に書き上げた反戦戯曲『人類最後の日々』を英訳出版したいという提案があった際、クラウスはこの話にヴィッテルスが関わっているという理由で、提案を拒否する。そしてこの件に関する書簡の中で、クラウスはヴィッテルスが「遺憾ながら」かつて『ファッケル』の寄稿者であったこと、しかしながら暴露小説を書いてクラウスを辱めた上に、当の小説執筆後に「あなたなしでは生きていけない」などと書いてよこした信用ならない人間であることを強調し、自分同様フロイトにも「絶交」を言い渡されていることを指摘している<sup>(51)</sup>。レンシングはこの書簡を引用しつつ、クラウスのヴィッテルスへの「憎しみ」が、シンクレアの提案を拒否する一因になったと考えている<sup>(52)</sup>。このチャンスを逃した結果、クラウスの最高傑作である『人類最後の日々』は長らく英語圏の読者には未知の書物であり続けることになるのである。

それではクラウスとフロイトの関係はどうなったのであろうか。フロイトはクラウスに対する無視を続けた。公の場でのクラウス批判は存在しないが、一九二七年に書いたアルノルト・ツヴァイク宛書簡の中ではクラウスのことを「私の敬意のリンク付けにおいて、最低の場所に位置する奴」とこき下ろしている<sup>(53)</sup>。またクラウスも一九三四年に刊行した『ファッケル』所収の長大な反ナチス論文「なぜ『ファッケル』は刊行されないか」の中で、同時代における「プレスと精神分析による人間の愚昧化」を指摘する<sup>(54)</sup>(F890-905:140, 1934)。「ナチズムはプレスを否定したのではなく、プレスがナチズムを生み出した」(F890-905:141)と主張するクラウスの論法に従えば、彼は精神分析をプレス同様ナチズムの登場を可能にするような精神状況を生み出した元凶とみなしていた、といえる<sup>(54)</sup>。クラウスが精神分析

の手法を終生許さなかったことは、このように最晩年の著作からも読み取ることができる。

しかし、何人かの論者が指摘するように、クラウスは一九一〇年前後においてはフロイト個人の人格を否定するような批判を明示的に行っていない。<sup>(55)</sup>クラウスの批判の多くはフロイトの弟子に向けられたものであった。一方でフロイト自身もヴィッテルスやグラーフ、ザドガーといった自身の弟子が行ったような精神分析の安易な応用には、クラウス同様、批判的であった。ゲイのフロイト伝においても、クラウスの精神分析学批判がフロイト本人というよりも、あくまでその図式的応用に向けられていたこと、そしてフロイト本人も弟子たちの行う精神分析の通俗化を嫌っていたことが強調されている。<sup>(56)</sup>

クラウスとフロイトは二〇世紀初頭に、女性に対する抑圧的な性道徳や同性愛を罪として裁く道徳法に反対する共闘から親交を始めたわけであるが、こうした旧弊な性道徳に反対する姿勢は両者共に終生変わっていない。一次大戦後、両者は共に反動勢力に抵抗し社会民主党と共和国を支持した。そしてナチス・ドイツによる合邦の危機のもとエンゲルベルト・ドルフスのオーストロ・ファシズム政権が成立すると、両者はかたくなにイデオロギーに固執する社民党に見切りをつけ、ナチスに対するオーストリア独立の擁護者としてドルフスを支持する。一八四八年革命以降の解放の波に乗り社会的上昇を果たした同化ユダヤ人に属するクラウスとフロイトの人生行路は思った以上に近い。<sup>(57)</sup>彼らの基本姿勢はリベラルな個人主義者ともいうべきものであった。両者の関係の悪化は、思想的に全く相容れなかったということよりも、ヴィッテルスを介した個人的な感情のもつれが原因であったといえよう。クラウスとフロイトの相互批判は、罵りあいではなくもつと生産的な討議になる可能性があった。この二人の知識人が短い蜜月の後、長い対立に入ってしまったことは、オーストリア思想史にとって不幸なことであった。

\* Die *Fackel* からの引用は、本文中にFと略記し、頁数と刊行年を記載した。

\* ウィーン精神分析協会の議事録に於けるHermann Nunberg und Ernst Federn (Hg.), *Protokolle der Wiener Psychoanalytischen Vereinigung* (1976 = 2008, Giessen) からの引用は、本文中にProtokolleと略記し、巻数と頁数を記載した。

\* フリッツ・ヴァイツェルスの自伝 (Edward Timms [ed.], *Freud and the Child Woman, The Memoirs of Fritz Wittels*, Yale University Press, 1995) からの引用は、本文中にMemoirsと略記し、頁数を記載した。

- (1) 「クラウスとフロイト」をめぐる先行研究は主に以下のものを参照した。Erwin Hartl, Karl Kraus und die Psychoanalyse, Versuch einer Klarstellung, in: *Merkur*, 31, 1977, S. 144-160; Nike Wagner, *Geist und Geschlecht. Karl Kraus und die Erotik der Wiener Moderne*, Frankfurt am Main, 1982, S. 118-131 (『世紀末ウィーンにおける精神と性』菊盛英夫訳、筑摩書房、一九八八年、一二五—一三九頁); Edward Timms, Sorcerers and Apprentices: The Encounter with Freud, in: *Karl Kraus, Apocalyptic Satirist, Culture and Catastrophe in Habsburg Vienna*, Yale University Press, 1986, pp. 94-114; Thomas Szasz, *Anti-Freud: Karl Kraus's Criticism of Psychoanalysis and Psychiatry*, 1976 = 1990, Syracuse University Press; Albin Waldvogel, Karl Kraus und die Psychoanalyse. Eine historische-dokumentarische Untersuchung, in: *Psyche*, 44 (5), 1990, S. 412-444; Beate Petra Kory, *Im Spannungsfeld zwischen Literatur und Psychoanalyse. Die Auseinandersetzung von Karl Kraus, Fritz Wittels und Stefan Zweig mit dem "grossen Zauberer" Sigmund Freud*, Stuttgart, 2007; シャン＝フランソワ・ラブレニー「フロイト(とその顛末)——カール・クラウスと精神分析」もしくはある敵意の掛け金」合田正人訳、『思想』二〇一二年六月号、一七三—一九五頁。
- (2) Timms, *Karl Kraus*, p. 94; Szasz, *Anti-Freud*, p. 20.
- (3) 例として Sigmund Freud, Die "kulturelle" Sexualmoral und die moderne Nervosität (1908), in: *Gesammelte Werke, Band VII*, 1941 = 1993, Frankfurt am Main, S. 163 (『文化的』性道德と現代の神経質症」道籟泰三訳、『フロイト全集』第九巻、岩波書店、二〇〇七年、二七三頁)を参照。
- (4) Sigmund Freud, *Briefe 1873-1939*, Ausgewählt und herausgegeben von Ernst L. Freud, Frankfurt am Main, 1960, S. 248-249 (『フロイト著作集』第八巻、生松敏三他訳、人文書院、一九七四年、二五八—二六〇頁)。
- (5) Hartl, Karl Kraus und die Psychoanalyse, S. 152; Szasz, *Anti-Freud*, p. 21.
- (6) Freud, *Briefe*, S. 248 (二五八頁)。

- (7) Hartl, Karl Kraus und die Psychoanalyse, S. 162; Timms, *Karl Kraus*, p. 95.
- (8) ティムズは同論の掲載を「幼児性欲の強調ゆえに中傷にやられいられたフロイト」に対する支援と見ている (Timms, *Karl Kraus*, p. 94)。
- (9) Hartl, Karl Kraus und die Psychoanalyse, S. 161.
- (10) Freud, Die "kulturelle" Sexualmoral, S. 163 (二十七頁)。
- (11) Sigmund Freud und Sándor Ferenczi, *Briefwechsel Band I, 1908-1911*, Eva Brabant, Ernst Falzeder, Patrizia Gimapieri-Deutsch (Hg.), Wien, 1993, S. 242.
- (12) ヴィッテルスにうつは自伝のなか、Philip R. Lehman, Fritz Wittels 1880-1950, in: *Psychoanalytic Quarterly*, 20, 1951, pp. 96-104を参照のこと。なおヴィッテルスの著作は二冊邦訳やれはなり、*Critique of Love* (New York, 1929) の邦訳である『愛の精神分析』(井沢三樹訳、アルス、一九三〇年)と*Sex Habits of American Women* (New York, 1951) の邦訳である『性と女』(柴田実訳、啓明社、一九五四年)がある。
- (13) Leo A. Lensing, "Geistige Väter" & "das Kindweib", Sigmund Freud, Karl Kraus und Irma Karczewska in der Autobiographie von Fritz Wittels, in: *Forum*, 430-431, 1989, S. 62-71; Edward Timms, The 'Child-Woman': Kraus, Freud, Wittels and Irma Karczewska, in: *Vienna 1900: From Albenberg to Wittgenstein*, Edward Timms and Ritchie Robertson (ed.), Edinburgh University Press, 1990, pp. 87-107; Leo A. Lensing, "Freud and the Child Woman" or "Kraus Affair"? A Textual "Reconstruction" of Fritz Wittels Psychoanalytic Autobiography, in: *The German Quarterly*, vol. 69, no. 3, Summer, 1996, pp. 322-332.
- (14) ヴィッテルスの自伝の編集者であるティムズは、自身のクラウス伝を含め、従来の研究におけるヴィッテルスとクラウスやフロイトの関係性をめぐる議論が「不確定」であったことを指摘した上で、同自伝の発見により三者の関係性の詳細な再構成が可能になったと述べている (Timms, 'The "Child-Woman"', p. 87)。
- (15) この論文は「クラウスと『フマツケル』を当時の刑法との関連から検討した Reinhard Merkel, *Strafrecht und Satire in Werk von Karl Kraus*, Frankfurt am Main, 1998, S. 408-417 に基づく詳細な検討やれはなり。
- (16) Frank Wedekind, Mutter und Kind, in: *Morgen, Wochenschrift für deutsche Kultur*, 14 Juni 1907, S. 61-62.
- (17) Timms, *Karl Kraus*, pp. 75-80. 同書には上演の際のプロログラムが掲載されている。
- (18) Wedekind, Mutter und Kind, S. 62.

- (19) Mirko Nottscheld (Hg.), *Karl Kraus-Frank Wedekind. Briefwechsel 1903 bis 1917*, Würzburg, 2008, S. 98-99, 204-205.
- (20) Wagner, *Geist und Geschlecht*, S. 129 (一三七頁); Timms, 'The "Child-Woman"', p. 91.
- (21) ただし『議事録』の注によると、フロイトは後に愛から憎しみへの転移という考え方を捨て、両者を異なる欲動として論じるようになる(Protokolle I, S. 155)。
- (22) レンシングはビッチャマンの批判を重視し、これがクラウスを念頭に置いたものであることを指摘する。Lensing, "Geistige Väter", S. 64.
- (23) Protokolle I, S. 182にはその概略だけが記されている。記録がない理由を、ティムズは「『ヴェイッテルスの』主題——早熟で、まったく抑制されることのない女性のセクシュアリティの崇拜——が(学問的会議)の速記記録に残ることはあまりにスキャンダラス」と考えられたからではないか、と注記している(Memoirs, p. 169)。一方でレンシングは、「偉大なヘタエラ」報告が「女医」報告以上に厳しい批判を浴びたがゆえに、記録をあえて残さなかったのではないかと推測する(Lensing, "Geistige Väter", S. 64)。
- (24) Timms, *Karl Kraus*, p. 71; Wagner, *Geist und Geschlecht*, S. 132 ff (一四一頁以下)。
- (25) フランク・ヴェーデキント『地霊・パンドラの箱』岩淵達治訳、岩波文庫、一九八六年、一三頁。
- (26) Lensing, "Geistige Väter", S. 64.
- (27) 例えばヴェイッテルスは自身の恋人イルマに関し、「神経症とは抑圧と葛藤の産物なのだから、彼女はわれわれの神経症的な時代には適合しない、非神経症的な魂を持った原型なのだ」とみなしていた(Memoirs, 62)。すなわち誰の男のものにもならず奔放な性生活を送ることができれば、女性には神経症になることはない、と彼は想定していた。
- (28) ゲーテの詩『魔法使いの弟子』とは、魔法使いの老師がいない間に、その弟子がうろ覚えの魔法を使って箒に水汲みをさせていたところ、魔法を解く呪文を忘れたため家中が水浸しになってしまうという内容である。非常にポピュラーな作品で、フランスの作曲家ポール・デュカスが曲をつけており、ディズニーの映画『ファンタジア』にも登場する。
- (29) Fritz Wittels, *Freud and his Time: The Influence of the Master Psychologist on the Emotional Problems in Our Lives*, New York, 1931, pp. 406-407.
- (30) この作品の解釈については、ラブレニー「フロイト(とその顛末)」も参照のこと。
- (31) 『ゲーテ全集』第一巻、人文書院、一九六〇年、二四〇—二四三頁。

- (32) Timms, *Karl Kraus*, pp. 96, 103; Szasz, *Anti-Freud*, p. 23; ラブレニー「フロイト（とその顧末）」一七四頁。
- (33) 「Talent」という単語の意味については、邦訳『黒魔術による世界の没落』（山口裕之・河野英二訳、現代思潮新社、二〇〇八年）の訳者解説（三六一頁）を参照のこと。また本文中に後述するヴィッテルス批判のアフォリズムにおいても、クラウスは「Talent」批判という形でヴィッテルス批判を展開している（F266: 20, 1908）。
- (34) Peter Gay, *Freud, A Life for Our Time*, New York, 1988, p. 250（「フロイト」第一巻、鈴木晶訳、みすず書房、一九九七年、二九六―二九七頁）。ここでゲイが指摘しているように、フロイト本人はこの問題について最晩年の論文「分析における構築」でとりあげ、自分たちはそのような単純化を行うことはなると抗弁している（Sigmund Freud, *Konstruktionen in der Analyse* (1937), in: *Gesammelte Werke Band XVI*, Frankfurt am Main, 1950 = 1983, S. 41-66「分析における構築」渡邊俊之訳、『フロイト全集』第二巻、岩波書店、二〇一一年、三四―三五七頁）。
- (35) Karl Popper, *Conjectures and Refutations, The Growth of Scientific Knowledge*, London, 1963 = 1969, pp. 34-38（「推論と反駁——科学的知識の発展」藤本隆志・石垣壽郎・森博訳、法政大学出版社、一九八〇年、五八―六五頁）。クラウスとポパーの批判の比較については Szasz, *Anti-Freud*, pp. 72-76 を参照のこと。
- (36) Timms, 'The 'Child-Woman'', p. 95. 先述したこの本の精神分析協会への合評会においても、フロイトはこの本のエビグラムにある「ausleben」という単語をあえて用いて、「『ファッケル』はセクシュアリティの解放（Ausleben）を支持するが、われわれ精神分析協会はそれとは異なる」という趣旨の発言を行っている（Protokolle II, 81）。つまり同著がクラウスの著作であることを、フロイト自身も認めていたわけである。
- (37) ヴィッテルスはこの批判について、「ほとんどが私以外の誰も、その意味をわからないようなものだった」と書いているが（Memoirs, 91）クラウス・サークルではその意味は自明のことで、そのうちの一人カール・ハウアーは「二月三日付のクラウス宛書簡の中で『あなたの W [Itels] に対するアフォリズムはすばらしいですね。奴がどんな反応を示すのか楽しみです』と書き送った」（Lensing, "Geistige Vater", S.67）。
- (38) Timms, 'The 'Child-Woman'', p. 96.
- (39) アニーは早くも創刊当初の『ファッケル』（Z: 28-29, 1899）で言及されているクラウスお気に入りの女優で、彼は舞台への出演交渉から、結核に罹ったアニーの看病、さらには彼女が天逝した後の、故人の名誉を汚す新聞記事への訴訟に至るまで色々と世話を焼いた。二人の関係については、やはりあたり Timms, *Karl Kraus*, pp. 72-75 を参照のこと。

- (40) 「女性の美的天才性」とは『フマッケル』(FB1: 18-21, 1901) において——ペーター・アルテンベルクからの書簡という形で——ブニーについて語られている部分にあたる。
- (41) Ernest Jones, *Sigmund Freud, Life and Work*, vol. II, London, 1958, pp. 133-134 (『フロイトの生涯』竹友安彦・藤井治彦訳、紀伊国屋書店、一九六九年、一〇六頁)。
- (42) Saszi, *Anti-Freud*, pp. 25-26; Timms, *Karl Kraus*, p. 103; Lensing, “Geistige Vater”, s. 62; Kory, *Im Spannungsfeld zwischen Literatur und Psychoanalyse*, S. 32.
- (43) Geroge C. Avey (Hg.), *Feinde in Scharen. Ein wahres Vergnügen dazusein. Karl Kraus – Herwarth Walden Briefwechsel 1909-1912*, Göttingen, 2002, S. 160, 469.
- (44) Freud und Ferenczi, *Briefwechsel*, S. 213. ただし『フマッケル』第二九四号には、第三〇〇号ほど明確な形での精神分析への批判は書かれていない。このフロイトが言う「不快な攻撃」が何を指すのかは不明である。前注に挙げたクラウスとヴァルデンの往復書簡集の編者は、クラウスがヴィツテルス報告の内容をすべに察知し、それに対して自己防衛を行うと公言したことに反応して、フロイトがこのような内容の書簡を書いたと推測している (*Feinde in Scharen*, S. 469)。
- (45) 同じく四月一二日付のフェレンツイ宛書簡の中でもフロイトは「フマッケル・クラウスは精神分析に向けて彼のウィットの愚かなロケットを打ち上げてきましたね。いずれにせよ、ウィーンにおける〈文化闘争者〉があえて行うことを見るのは興味深いものです」と書いている (Freud und Ferenczi, *Briefwechsel*, S. 241-242)。フロイトがいかにも『フマッケル』に注意を払っていたのかはこうした事実から明白であるといえる。
- (46) Timms, *The ‘Child-Woman’*, p. 97.
- (47) Freud und Ferenczi, *Briefwechsel*, S. 305.
- (48) Timms, *The ‘Child-Woman’*, p. 104.
- (49) Karl Kraus, *Briefe an Sidonie Nádlerin von Borutin 1913-1936*, München, 1974, Band I, S. 569 und Band II, S. 344.
- (50) Hartl, *Karl Kraus und die Psychoanalyse*, S. 147.
- (51) Leo A. Lensing, *Karl Kraus as “Volksklassiker”?* Upton Sinclair and the Translation of *Die letzten Tage der Menschheit* (Including an unpublished Kraus manuscript), in: *Deutsche Vertiefahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte*, 59, 1984, S. 156-168.

- (52) Lensing, Karl Kraus as "Volksklassiker"? , S. 167.
- (53) Sigmund Freud und Arnold Zweig, *Briefwechsel*, Frankfurt am Main, 1967, S. 11.
- (54) このクラウスの精神分析批判、プレス批判、ナチズム批判の思想的連関の詳細については、紙幅の都合上別稿の課題としたい。
- (55) Timms, *Karl Kraus*, p. 113; Wagner, *Geist und Geschlecht*, S. 120 (一二七頁)。
- (56) Gay, *Freud*, pp. 214-215 (一二五—一二五四頁)。
- (57) 両者の経歴、思想の類似性については Kory, *Im Spannungsfeld zwischen Literatur und Psychoanalyse*, S. 50 ff を参照のこと。

※本論文は「博士課程学生研究支援プログラム」並びに「卓越した大学院拠点形成支援補助金」による研究成果の一部である。

高橋 義彦 (たかはし よしひこ)

所属・現職 慶應義塾大学大学院法学研究科後期博士課程

最終学歴 慶應義塾大学大学院法学研究科前期博士課程

所属学会 政治思想学会、社会思想史学会

専攻領域 政治思想史、オーストリア・ドイツ政治文化史

主要著作

「エリック・フェーゲリンのウィーン——オーストリア第一共和国とデモクラシーの危機」『政治思想研究』第一二号 (二〇一二年)

「カール・クラウスと二つのファシズム」『法学政治学論究』第九二号 (二〇一二年)

「カール・クラウスとアドルフ・ロース——世紀転換期ウィーンにおける『裝飾』批判とその意味」『法学政治学論究』第九八号 (二〇一三年)